慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	浅井了意筆『蓬莱山』『武家繁昌』をめぐって
Sub Title	A study on "Hōraisan" and "Bukehanjō" written by Asai Ryōi
Author	石川, 透(Ishikawa, Tōru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2019
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.117, (2019. 12) ,p.199- 204
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤道生教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01170001-0199

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

浅井了意筆『蓬萊山』『武家繁昌』をめぐって

石川　透

一、はじめに

浅井了意が本文を執筆した絵巻群については、近時、多くの作品が出現し、『長恨歌』絵巻と版本『楊貴妃物語』の関係と作者について、簡単にではあるが、「浅井了意筆『長恨歌』断簡の出現」と題して、辻英子氏編『海を渡った日本絵巻の至宝』（笠間書院、二〇一七年一二月）に執筆した。また、『咸陽宮』絵巻についても、本文を浅井了意とする伝本が出現したため、「浅井了意筆『咸陽宮』絵巻について」と題して、同じく辻英子氏が編集予定の著書に執筆した。

『長恨歌』絵巻については、仮名草子に分類されている版本『楊貴妃物語』とほぼ同本文であるため、『長恨歌』絵巻の本文も作者は浅井了意と考えて良いのであるが、本文的には微妙に異なる『長恨歌』絵巻の断簡が出現したため、浅井了意は、本文を少し変えた、いわゆる異本に相当するような作品も作成したであろう、と考えたのである。

同じように、『咸陽宮』絵巻も、浅井了意筆本と現存伝本の本文とを比較すると、微妙に異なる異本が存在するため、全てが浅井了意の所為とは言えなくとも、一部については、浅井了意が本文を変えてしまうことがあったであろうと推測した

のである。

このような研究が重要なのは、作者が全く分からなかった御伽草子作品の作者の特定に繋がる、ということと、あわせて、これまでの御伽草子や仮名草子といった分類があまり意味をなさなくなってきている、ということの確認ができるからである。

このような中で、やはり、浅井了意が本文を執筆した絵巻が残る御伽草子作品として、内容的に浅井了意が書いたのではないか、いわゆる作者は、浅井了意ではないかと思われる作品がまだ存在している。そのうち、『蓬莱山』絵巻と『武家繁昌』絵巻を取り上げて考察を試みたい。

二、『蓬莱山』絵巻について

『蓬莱山』絵巻については、最近、イギリス人スイフトが一七二六年に刊行した『ガリバー旅行記』の天空の島（ラピュタ）の原型になったろうとの推測をしているが、もし、その絵だけを外国人が見たならば、さまざまな島をめぐる空想冒険小説に見えたであろう。この『蓬莱山』の絵と、『御曹司島渡』の小人と馬人の島の絵を見て、さらに、長崎や江戸等の日本の知識が入れば、『ガリバー旅行記』の骨格は出来上がるのである。そのような海外にまで影響を与えた可能性のある重要な作品であるが、この問題については、別に論じる予定である。

ところで、『蓬莱山』は、御伽草子に分類されているが、他の御伽草子のように一つの一貫した物語が展開しているわけではない。蓬莱山をめぐるさまざまな時代と地域の話が登場することから、説話集とも考えられるし、さらにふさわしいのは、一つのテーマでさまざまな話を集めた仮名草子的な内容と考えることであろう。たとえば、浅井了意は、和漢のさまざまな時代の怪談を集めた作品をいくつも記している。『蓬莱山』の内容は、それに近いのである。

このような和漢の説話を集めることができる人間は、ある程度限られている。もし、漢籍から直接引用する場合には、とうぜん、漢文が読めなくてはならない。当時の知識人ならばそのようなこともできたろうが、それらの説話を集めるには膨

大な知識、あるいは、具体的に、和漢に渡る膨大な蔵書がなければできるものではない。そのような人間の代表が浅井了意であるので、とりあえずは、浅井了意のような人物が内容を記したであろうことは間違いない。

となると、御伽草子よりは、仮名草子に分類すべきことになる。『蓬萊山』については、寛文四年（一六六四年）に「蓬萊山由来」と題する版本も存在しているので、少なくとも「蓬萊山由来」は、仮名草子にも分類されているが、『蓬萊山』絵巻もそう遠くない頃には成立していたであろう。

ここで、『蓬萊山』絵巻のうち、本文を浅井了意が執筆した伝本の書誌を記すと以下のようになる。

蓬萊山絵巻

［所蔵］架蔵

［形態］絵巻、二軸

［時代］寛文年間頃

［寸法］縦三三・三糎

［表紙］黄土色金繍表紙

［外題］題簽「ほうらい山」

［内題］なし

［料紙］斐紙

［奥書］なし

［複製］『室町物語影印叢刊』二二

［翻刻］『古典資料研究』一五

ちなみに、『蓬萊山』の伝本は、絵巻と絵本については、ほぼ同じ頃の制作と考えられ、絵巻については、その本文の執筆者が浅井了意周辺の人物に限られている。なお、時代判定を含む執筆者の問題については、拙著『奈良絵本・絵巻の生成』（三弥井書店、二〇〇三年八月）、『奈良絵本・絵巻の展開』（三弥井書店、二〇〇九年五月）等を参照願いたい。

明らかに浅井了意以前と言える伝本は存在していないのである。もちろん、だからといって、浅井了意が内容を書いたと断定するのは容易なことではないが、可能性の一つとして、浅井了意が内容を執筆し、その一部は自筆版下の版本と同じように、作者浅井了意自らが執筆した、ということを提唱したい。

三、『武家繁昌』絵巻について

実は、内容構成上、『蓬萊山』ときわめてよく似ているのが、『武家繁昌』である。「蓬萊」と「武家」では、一見すると内容上は、全く別の物語となる。『蓬萊山』と同じように、『武家繁昌』には、和漢の説話が数編づつ登場し、大きな「武家繁昌」というテーマでくくられているのである。『武家繁昌』については、版本は存在していないので、分類上は御伽草子となっているが、『蓬萊山』で説明したのと同じ、説話集的な構成という理由だけからでも、御伽草子とするには無理があるのである。

その『武家繁昌』に、本文を浅井了意筆とする絵巻が存在していたのである。その簡単な書誌を『蓬萊山』にならって記すと以下のようになる。

武家繁昌絵巻
［所蔵］國學院大學図書館
［形態］絵巻、二軸
［時代］寛文年間頃

［寸法］縦三三・三糎
［表紙］紺色地金繡表紙
［外題］なし
［内題］なし
［料紙］斐紙
［奥書］なし
［複製］なし
［翻刻］なし
（以上、主に松尾葦江氏編『國學院大學で中世文学を学ぶ』による）

この本文が浅井了意筆の絵巻が存在することにより、『武家繁昌』も、『蓬萊山』と同じく、内容も浅井了意が書いた可能性を考えるべきであろう。この『武家繁昌』の他の伝本も、これまでのところ、浅井了意を遡る作品は出てきていない。

『武家繁昌』には、天照大神による天岩戸の話が登場するが、同じ話は、『船の威徳』という御伽草子にも、登場する。この『船の威徳』は、これまでのところ、浅井了意筆の伝本は登場していないが、内容的には、和漢の「船」にまつわるエピソードを集めた説話集的な内容なのである。浅井了意筆の作品が出てくれば、『蓬萊山』『武家繁昌』と同じく、浅井了意作の可能性を考えるべきであろう。やはり、浅井了意以前の伝本は存在しないことから、少なくとも御伽草子よりは、仮名草子に入れるべき作品と言えよう。

四、おわりに

これまで、御伽草子に属すとされてきた和漢の説話集的な作品群についての論文は、その多くが、御伽草子かその類語を

伴った題目が付されてきたが、いったん、御伽草子に分類されてしまうと、検索にもかかりにくいことになってしまう。特に、物語・小説の類は、簡単には、成立年代が明らかにならなかったが、現代は、少なくとも伝本の時代判定は、かなり正確になってきている。次は、内容上の制作年代をより正確に特定すべき時代が来ているのである。そうなることによって、これまで不明であった作者の問題も、自ずと解決の方向へ向かうと考えている。